

藤村の「草枕」とミルトンの『失樂園』

——藤村の「ヒューマニズム」への一視点——

橋 浦 史 一

藤村には、ミルトンの『失樂園』（「パラダイス・ロースト」）の翻案とみられる「草枕」という作品がある。明治二十七年一月、『文学界』第十三号に掲載した作品である。これより以前、藤村は、明治二十五年二月、『女学雑誌』第三百五号に「詩人ミルトンの妻」を、さらに、明治二十五年三月『女学雑誌』第三百十号に、「イーブを懷ふ」を発表して、ミルトンや、「アダム」と「イーブ」の物語である、『失樂園』の中で重要な役割をになう「イーブ」について関心を示していた。「詩人ミルトンの妻」は、ミルトンの不幸な結婚生活を描いて、ミルトンと結婚した三人の妻のことに言及したものである。この文章の最後に、「パラダイス、ロースト」の名がみえる。「イーブを懷ふ」は、神の「樂園」にあって、「蛇」に姿をかえた「悪魔」の誘惑に落ちて禁断の木の実を食べ、それを「アダム」にも進めて神の怒りをおこした「イーブ」の愛について論述したものである。これは周知のように、『旧約聖書』創世記第二章及び第三章に描かれている話である。この「イーブ」の愛について述べた「イーブを懷ふ」は、「草枕」の世界へそのまま続いて行く内容を持った文章と見ることが出来る。しかし、この「イ

ーブを懷ふ」と「草枕」との関係を見ると、「イーブを懷ふ」では、「イーブ」の愛のあり方が否定的にとらえられており、「草枕」では、「イーブ」の恋が肯定的に描かれているのである。「イーブを懷ふ」に付された序文は、

そもくこの世を以て涙を片手の逆旅なりとせむか左ればその悲哀と失望とをひらき初めしものはわがイーブの迷ひなりけり世に女子をもていたく執着のおもひ深きものとなせるはあながち其故なきにあらざるべし。かの人間のだらくせむとするや女子まず墮落す（『旧約聖書』の内容によっている。―注）。いざや高潔なる信仰に三昧して人世をきよらかなるかたにみちびかむこそその世に酬ゆるつとめとはいふべかりけれ（ルビは筑摩書房版『藤村全集』による。以下同じ。―注）

というものである。「イーブ」の愛を否定的にとらえていることが明らかである。しかし、「イーブを懷ふ」の内容そのものがそうしたこと何よりも明確に語っている。それは次のような個所に明らかである。

イーブは神を措て其夫を愛したりし前すでに神を措て其身を愛したりしがごとし。これイーブが神より稟けたる賦性の十全円満なるを知り十全円満なるを知りてのちみづから誇りみづから

驕るの情をこしみて、つから驕るの情をこしてのち遂に上帝を
ないがしろにするの邪念を生じたるものなりけり。さればイー
ブが十全円満なりし賦性は、反てこれその身のためにあだとなり
優なりしこゝろも鬼とかはりて是が為にその夫を引て無限の零
落に向はしめぬ。さるはアダムがイーブの愛着の羈絆にほださ
れつその清婉にして妬心ふかき姿にまよい遂に無二の上帝を描
て愛の涙に天道の眼も眩みたればなるべし。もとより吾妻のい
ふことゝあらば盤石の心も溶けやすきこと世の夫の慈目なり左
れど神とゝもに生きむよりは妻とゝもに死なむとはげにあさま
しの人の心や噫かれらはこれによりて人間墮落の悲画をうつせ
りけり

この文章の中で注意しておきたいのは引用の最後の箇所、「左れ
ど神とゝもに生きむよりは妻とゝもに死なむとはげにあさましの人
の心や噫かれらはこれによりて人間墮落の悲画をうつせりけり」と
いう部分である。この箇所は、後に述べる藤村の「草枕」の最終部
分と照応させて見る時、この「イーブを懷ふ」と「草枕」との間
に、藤村のヒューマニズムを考へる上で著しい変容を見てとるこ
とができるのである。この「イーブを懷ふ」が「人倫五常の道」と
いった東洋的思想を包括しつつ、キリスト教思想の観点から書かれ
た文章であることは、この文章の最後の一節に、「人の世にありて
鸚鵡たる『無限』の松風に心耳のけがれをあらはむとするものは先
づ『我』を捨てゝ人を愛するのこゝろさしなかるべからず。イーブ
は人のために愛せられむと思ひ人の為によるこばれんと願ひて遂に
永遠のあはれとどめたりけり。」と言った、日本の風流思想を思わせ
る言葉をとめないながら、キリスト教の憐人愛を説く教えを示す文
章でしめくられていることから明らかである。藤村が、こうした

「イーブを懷ふ」という文章を書きながら、後、傾向の異った「草
枕」を発表することになるわけだが、この期間の間に、佐藤輔子へ
の恋愛体験などがあつた。

「草枕」の文体は、浄瑠璃調である。たとえば「草枕」の文章
の、「あれ／＼／＼そこへ通るは、そこへ通るは悪魔ぢやないか。」
といった文体とその調子は、近松門左衛門の「五十年忌歌念仏」の
下之巻の良く知られたせりふ、「向通るは清十郎ぢやないか。笠が
よく似た。菅笠がよく似た笠が。」ときわめて良く似たものになっ
ている。しかも近松のほとんどの浄瑠璃と同様、「上、中、下」と
分けられて三段から構成されている点でも、構成上から見た場合、
近松の浄瑠璃に近い類似性がみられる。「草枕」の『失樂園』との
対応関係は、主な登場人物が「アダム」と「イブ」、それに「悪
魔」である点、又、場所が神の花園（樂園）である点で明瞭である
が、原文との言葉の上での照応関係は、ほとんどたどれないものとな
っている。すなわち素材を『失樂園』に求めながら、そこに描か
れているのは藤村の変容になる「アダム」と「イブ」であり、その
思想は藤村のものであると言える。「草枕」の序文には、「これは
人に見すべきものにあらざれば深く文筐の底にをさめてと草し畢り
しは十八日のあさのことなり。」とあって、そう思っていたところ
たまたま机の上に載せておいたこの原稿を見て、「善罵先生」すな
わち『文学界』同人の馬場孤蝶が、「かゝる卑調にふさわしからぬ
詩題をけがし悲哀を画かんとして反てあさましき諧謔に落つるも鳴
辭なりとて、われにこの稿を焼くべし」と言ったことが記され、
「平生われを恕すること先生のごとく、情の画き難きを知ること先
生のごとくにして、かくまでにわれを戒むるものをとそそのいふこと
ろに従はん」と思っただけども、「編輯氏の寛容なるかゝるものだ

に捨つることを許さず強いて若水のすさびのうちにをさめむといふ。」と語られて、「読む人たゞこれ酔人の譚言として其風情の賤しきをなとがめたまひぞ」と結ばれている。「草枕」がキリスト教的世界に素材をとりながら、そこに描かれた内容が反キリスト教的性格の著るしいものであったところに、こうした序文が書かれたゆえんがあったと推察される。馬場孤蝶から非難を受けたこの作品は、一方、やはり『文学界』同人だった平田靉木からは推賞を受け、シェイクスピアの『ヴィーナスとアドニス』の翻案「夏草」と共に、一本にまとめて出版することを勧められたと言う。

二

「草枕」の「上」では、「アダム」の「イーヴ」に対する恋の心情が描かれる。

そもや恋の神といふ神は、夜はいづこにて眠るやら、其でも恋の神様が、眠れる姿をついぞ見ぬ。イーヴの影の目にあれば、昼も夜となり、夜も昼となり、闇も闇ならず暗からず。禁制の樹のかげに覚め、野草の露を踏み分けては、イーヴのあとを尋ね行き、白鳥のあつまる石に枕して、心の水に添ふときは、イーヴの影を追ひ迷ふ。

とか、

この苦みがとれるなら、一生の身の仕合、いかなる事でも厭ひはせず。火水へも入り度き程の今の思ひ。いかなる神のたく火でも、この恋は燃えつきじ、いかなる花の浮いて行く、冷たい水の流れでも、わが恋は溺れまじ。

というのが「イーヴ」を思ふ「アダム」の心情である。「禁制の樹のかげに覚め」とか、「いかなる神のたく火でも、この恋は燃えつ

きじ」といった言葉に、反キリスト教的な恋の心情の予徴が見てとれる。又、たとえば次のような「悪魔」に対する「アダム」の言葉、

もうくイーヴくと言ふて下さるな。見るもくるし見ざるもくるし。何の事やら訳もなく、それ思ひ出す度ごとに、さっと川添の花を吹き、十里香を送る風のように、心の底のどん底を、吹いてはかほる恋ごころ。

といった恋の思いを述べる「アダム」の言葉は、『失楽園』の「アダム」と「イーヴ」の愛のあり方とは異っている。むしろ『失楽園』で否定された恋愛の様相を呈した表現となっている。『失楽園』では、「アダム」と「イーヴ」の愛のあり方が次のように説かれている。

そして、おそらく、アダムが美しい妻に冷たく背を向けるということも、またイーヴが夫婦愛の秘儀を拒むということも、ありえなかったと私は思う。世間の偽善者どもは、純潔や場所の適否や無垢などについて、いかにも譁々の議論を述べたてるが、それは彼らの自由だ。要するに、彼らは、神が純なるものとして祝し、或る者には命じ、すべての者にはその選択の自由を認め給うているところのものを、不純だと称して貶しているにすぎないのだ。創造者は、生めよ繁殖よと命じておられる。だとすれば、禁欲を命ずる者は、まさに人類の破壊者であり、神と人との敵でなくて何であるか？ されば、結婚愛よ、奇しき法則よ、汝の上に栄あらんことを！ 汝こそ、子々孫々にいたるまで人間の生き存える真の源、他の一切のものが共有できるこの樂園における唯一の私的なもの！ 汝によって、不倫な情欲は人々の間から追放され、獣類の群れに入り、彷徨うにいたっ

た。(中略)この「愛」は、愛情も歡喜も親しみもない、金で買われた娼婦の微笑や、一時の浮気や、宮廷恋愛や、男女入りまじつての舞踏や、淫らな仮面劇や、深夜の舞踏や、或はまた本来なら唾棄して然るべき傲慢な美女に對し恋に寢れた男が捧げるあの小夜曲などに見出されるものでは全くないのだ。今、アダムとイーヴは、夜鳴鶯の歌う子守唄にあやされながら、互に抱き合つたまま眠っていた。裸の肉体の上に、花の咲き乱れた屋根から薔薇の花弁が散つていた。(朝には再び新鮮な花が咲き揃うのだ。)眠れ、幸福な二人!もしお前たちがこれ以上の幸福を求めず、分を知つて今以上に知ろうとしなかったならば、どれほど幸福であつたことか!

ミルトンは「アダム」と「イーヴ」の夫婦愛を、神の名のもとに賛美しているが、藤村の描く「アダム」の「イーヴ」への思いは、ミルトンが否定した「恋に寢れた男が捧げるあの小夜曲などに見出されるもの」といった観を呈している。『失樂園』では、「アダム」と「イーヴ」の夫婦愛を説いて、「他の一切のものが共有できるこの樂園における唯一の私的なもの」と語られて、「もしお前達がいれ以上の幸福を求めず、分を知つて今以上に知ろうとしなかったならば、どれほど幸福であつたことか!」と説かれている。藤村の「草枕」「上」の結びの部分の「悪魔」の誘惑の言葉は、神の摂理にそむいて、「樂園」そのものを自分達のものにすれば良いではないか、人間と生れたからにははばからず禁断の恋の味を味わつたら良いではないかと語りかける。

是アダム。こうしたうつくしい姿をしても。天ばかり眺めては居られまい。思案しや。このうららかな花園は、みんなわれが寢床ぢやないか。目にうつくしい林檎を見れば、口には其を食

ひたいと思はぬか。鼻は流れ行く香にうたれて、手は其花びらを握らいでもよいか。やいうじ虫め。弱虫め。腰拔で何がなる。いやしくも人間と生れ来て、誰をか憚り誰をか懼れむ。

「草枕」の「悪魔」は、『旧約聖書』や『失樂園』のように、「蛇」に化身して神の「樂園」へのび込んだりはしない。「アダム」や「イーヴ」と同格に一人の登場人物として現れて誘惑の言葉を説く。

「草枕」の「中」では、「悪魔」の禁断の恋についての誘惑の言葉を「アダム」が「イーヴ」に告げるが、「イーヴ」はおどろいて「アダム」の言葉をしりぞける姿が描かれる。『失樂園』では『旧約聖書』同様、「蛇」に身を変えた「悪魔」が「イーヴ」を誘惑して禁断の木の実を食べさせ、さらに「イーヴ」が「アダム」をささうという手順で話が進むわけだが、藤村の「草枕」では、「アダム」が「悪魔」にさそわれ、さらに「イーヴ」にその言葉を話して拒絶される形となっている。最終的には、「イーヴ」は「アダム」の恋に従うのだが、そうした心境におちいらせる「悪魔」の誘惑の言葉は、近松の浄瑠璃や人情本に見られるような、『失樂園』には見られない藤村独特の内容のものとなっている。しばらく「草枕」のそうした「アダム」と「イーヴ」と「悪魔」の言葉を順を追つてたどつてみる。

(アダム) (悪魔は一注) あゝした姿をして居ても(盲目なのである。一注)、うまいことを言ふたぞよ。このうららかな花園は、みんな二人が寢床ぢやげな。(イーヴ) あら欺されて居る。(アダム) 何を欺されう。目にうつくしい林檎を見れば、口には其を食ひたいと思はぬかとさ。鼻は流れ行く香にうたれて、手はその花びらを握らいでもよいかとさ。こうしたうつく

しい姿をしても天ばかり眺めては居られぬとき。(中略) 思ふても見よ。なんのための二人の命。なんのための二人の恋。花を見れば風をも待たず、落ちては色も香もうせて、うせてあとなきさまとなる。あざやかなるは花の色。短きものは其命。はかなきものは其姿。そもやそも二人が頬の花も散り、この唇の色落ちて、落ちてくだけてうするの、またよくひまであらうぞや、されどあはれに咲く花を、無理無体に欺いて、独りで咲いて独りで散れと、いはぬところが自然の細工。

こうした「イーブ」に対する「アダム」の言葉は、「イーブを懷ふ」の序文に記された「かの人間のだらくせむとするや女子まづ墮落す。」といった主張を、「アダム」の側から誘惑を持ちかける点で全くくつがえすものとなっている。藤村の変貌はあざやかである。

笹淵友一氏は、藤村が、明治二十五年七月から九月にかけて、「夏草」と題して翻案した、シェイクスピアの『ヴィーナスとアドニス』について、「若菜集時代の恋愛詩に見られる官能への憧憬は藤村の血脈の中に暗く高鳴り流れてゐたものであるが、それを自覚的なものたらしめる役割の幾分かを果たしたのが沙翁のこの作で、さういふ意味でこの作品は藤村文学の形成から切離すことの出来ない重要性を持つてゐる。といふのは藤村自身の言葉によれば明治二十九年夏仙台へ赴任した藤村は困窮と懊悩の中に見失はれかけた青春に再び立返らうとして『デンペスト』を閉ぢてもう一度『ヴィーナス・エンド・アドニス』を開かうと思ひ立つた。この青春の再認識から『若菜集』の中にあるやうなかず／＼の詩が、『自由に流れ出して来』たといふのである。(中略) 従つて『若菜集』に対してこの作品の演じた役割は大きい。」と指摘している。『ヴィーナス

とアドニス』には次のような「ヴィーナス」の言葉を見ることができ。

時を利用しなさい、よい機会をのがさないでくれ。／＼美はそれ自らのために費されてはいけない、盛りりの時に摘まれなければ、／＼美しい花もやがて朽ち滅びつくしてしまふのだ。

「夏草」における藤村の訳は、「こうした大事の／＼其時を、つい空に過しては、花の冥利の尽きた日に、何と申訳が立ちまじやうぞ。ホニに美しく咲いたとて盛りりの時にとらぬなら、直にしぼむでは御座んせぬか。」となっている。本堂正夫氏のこの個所の注解には、「シェイクスピアのソネット集の最初のグループ(一一六)と『ヴィーナスとアドニス』とに共通なテーマである。よい機会を逃さず、時を利用して美や青春を楽しめとすすめることはギリシアやローマの抒情詩にもよく見られるもので、十六世紀のフランスやイタリヤにもしばしば見られるようになり、従つてエリザベス時代の詩にも見られる。」とあるが、その主張は簡明である。そして藤村の『若菜集』にはこの主題で歌われた、『若菜集』の青春を語る時によくひきあいにだされる名高い詩、「醉歌」がある。すなわち、「若き命も過ぎぬ間に／＼楽しき春は老いやすし(中略) 悲しき味の世の智慧に／＼老いにけらしな旅人よ／＼心の春の燭火に／＼若き命を照らし見よ／＼さくまを待たで花散らば／＼哀しからずや君が身は／＼わきめもふらで急ぎ行く／＼君の行衛はいづこぞや／＼琴花酒のあるものを／＼とどまりたまへ旅人よ」と歌われたこの詩は、仙台の地で手に入れた青春の思いを吐露する『若菜集』の詩を書く創作主体、すなわち詩人藤村の詩人としての姿勢を歌った詩ともうけとれる内容をもっている点で重要な詩篇である。『若菜集』の「醉歌」につながると思われる『ヴィーナスとアドニス』の「ヴィーナス」の言

葉が示唆する、「よい機会を逃さず、時を利用して美や青春を楽しめ」という主張が、「草枕」の「アダム」の言葉においては、背教的な形をとって語られていることが指摘できる。

そうした「アダム」の言葉に対する「イーブ」の答えは、

(イーブ) あゝ恐い身がふるへる。あの悪魔めが碌な事は教えぬわいな。これアダム、イーブの思ふ恋人は、そうしたアダムではござんせぬ。今のは皆な悪魔めが、教へたことぢや、いつはりぢや。たとへいかなる巧みをかまへ、いかなることを言ふたとて、其を恋とは言はれませぬ。恋と色とは裏表。恋は生粋まざりけなし。色はだましぢや。いつはりぢや。

とあって、『失楽園』とは逆に「イーブ」が「アダム」のさそいを拒絶する形になっている。しかし、こうした「イーブ」の気持をくつがえす言葉が夢の中の「悪魔」の言葉となって語られる。

是イーブ。わりやあんまり正直すぎる。世に男といふものはそうしたうつくしい獣(けだもの)ではあるまいぞへ。男の心は何に譬へる。

猫の目か秋の日よ。(中略) 天を捜しても地を捜しても男といふ男はアダム一人、女はイーブ一人と思ふたら、われこそ馬鹿の大馬鹿ぢや。このだゞ広い花園を、たつた人間の一人や二人にあてがうといふ、白痴(たわけ)もあるまい。心と心で恋一つ。それもよからうさ。うつくしかろうさ。ひよつとアダムの気がふれて、心交りのした暁は、わりや其恋をなんとする。物は思案。切つても切れぬきづなをつけて、其のうつくしい身体(からだ)まで、しつかとくゝりつけてはどうぢや。

こうした「悪魔」の言葉を聞いて眠りからさめた「イーブ」の「アダム」に対する言葉。

是もし今迄の事は了見して、あの水に流して忘れて下され(ア

ダム) すりや恋は忘れよといふことか。(イーブ) いつ忘れよといひました。誰が忘れよと言ひました。忘る忘れぬといふよな、なさけ知らずであつたなら、こうした愚痴にもなるまいもの。今迄のはみんなイーブの思ひ違ひ。よしなき事に情を張り、お気にさわつてはと身が悲しい。火へ入れとあらば火へも入りたい。水へとあらば水へも入りたい。

ここまでくると『失楽園』の世界は遠のいて、世話物の人情話的な世界へ著るしく近づいた観を呈したものとなっている。男女間の心の機微、特に女性の男性に対する愛情の、不安な心のゆらぎをとらえることによって、「悪魔」の言葉が「イーブ」の心を実現するといった点に、『失楽園』の『旧約聖書』の叙述を踏まえた、キリスト教的な世界とはやや異なった話の展開のありようがうかがえる。

三

しかし、藤村のこの作品を通しての主張が最も明確にされるのは、「草枕」の「下」、すなわち最後の章においてである。

(アダム) 碌なことは悪魔は教えぬ。(イーブ) 教えたがわるいか、(アダム) 教えられたがわるいか。いや焼けつく様な日に照られ、渴(かわ)きゝつた喉元(のどもと)でも、飲むだけ飲めば見るのもいや。あゝ色はこうしたものか。

という言葉に続いて、

(アダム) オゝ其よ。見る／＼天の様子もかわり、雲は東へ飛び西へ飛び、空かき曇りかき乱れ、天は一面まつくろ／＼。

(イーブ) あゝ心も空も闇の闇。稲妻の光りに一目でも、せめては顔を見せて下され。(中略) こうして居ては身の不為。さ

らばと言ふてこの闇路。(イーブ) どうなることか身の行末。迷ひ迷ふ心の闇。かなたも闇。(アダム) こなたも闇。

という對話があり、結末部分が来る。藤村の主張が最も明確に打ちだされた部分である。

(イーブ) あゝもとんと目が見えませぬ。氣を取直し歌でも一つ、うたふて見んと思ふても、かなしいやらくるしいやらで、歌の調子の出ればこそ。ついあさましい氣になりそめて、今は悔いても返らぬこと。(アダム) なんの後悔をすることがあるう。この花園ばかりが宿かいの。二人で添ふて暮すなら、あのおそろしい地獄も極楽。添ふて添はれて暮されぬ、哀しい中であるならば、このうるはしい花園も、何の役にたとうぞや。(イーブ) あゝそうぢや。こうして添はるゝものならば、闇でもいゝ。地獄でもいゝ。よしや神鳴りひびき、月日もかくれ、星も落ち、世はとこやみになるとても、アダムの花のかほりをば、嗅いでも恋はするものを。言ふて返らぬことながら、元はと言へば是も皆、誠から出たこの身の罪。いとしさからの恋の罰。こうしたことになつたのも、みんなイーブの心から。われ故いとしいアダム迄、この花園を闇にして、身の行末の末の末、どうした事になるのかと、思へば胸もはりさく斗り。あゝ生きらるゝだけは生きても見たい。添はるゝだけは添ふても見たい。

「この花園ばかりが宿かいの。二人で添ふて暮すなら、あのおそろしい地獄も極楽。」こうして添はるゝものならば闇でもいゝ。地獄でもいゝ。」という言葉は踏まえて、「あゝ生きらるゝだけは生きても見たい。添はるゝだけは添ふても見たい。」という「草枕」の「アダム」と「イーブ」の愛は、背教的な様相が著るしい。

ミルトンの『失楽園』では、「悪魔」の誘惑によって、禁断の木の実を食べた「イーブ」が、「アダム」をさそつて淫欲を満した後、再び神の前に自らの罪を悔いることになっている。

われわれの父祖であり、今や悔い改めたアダムは、このように言つた。勿論、イーブもまた彼に劣らず心から悔いていた。直ちに彼らは神が自分たちを裁かれたあの場所に引きかえし、うやうやしく神の御前にひれ伏し、謙虚な氣持で自らの罪咎を告白して許しを乞ひ、いささかも偽りのない悲しみと柔和な謙遜のしるしとして、悔いた心から迸り出る二人の涙で地面をうるおし、二人の溜息でそのあたり一帯の空氣をみたしたのであった。

というのが『失楽園』の叙述である。神の「楽園」を追放されるに際しても、「アダム」と「イーブ」は自らの罪をみとめ、「天使」によって神の摂理を告げられ、「漂泊」の旅に出る時にあたつても、神を賛美しながら「楽園」を去って行くのである。

私(アダム・注)は、かくも大いなる教えを受け、かくも大いなる心の平和をえた今、喜んでここから出て行こうと思ひます。私は人間としてのこの器に盛りうる限りの知識を、充分にえたと思ひます。かつてこれ以上のものを望んだことは、私が愚かであつたからです。今後は、順うことこそ最善であり、唯一の神を畏怖をもつて愛し、常にその御前にあるものの如く歩み、絶えずその摂理を信じ、すべての被造物に恵みを垂れ給う神にひたすら依り頼み、常に善をもつて惡に打ち勝ち、——一見弱そうに思えるものをもつてこの世の強大なものを破り、柔和な無邪氣さをもつて世俗的な知恵を破るといった風に、小事をもつて大事をなしとげ、また、真理のためには苦難に堪える

ことこそ最高の勝利にいたる勇氣そのものであり、信仰をもっている者にとっては死も永遠の生命にいたる門にすぎない、ということをしつかり学んでゆきたいと思います。私はこれらのことを、げにわが主、永遠に榮あるわが贖罪主、と今こそ拝みまつるあの救主の示し給うた範例によって、教えられました。

というのが「樂園」を去る「アダム」の心境であり、又、「イーヴ」の心境は、

「とにかく、今こそ先に立って私を導いて下さい。私にはもはや躊躇はありません。あなた（アダム―注）と一緒に、ここを出ることはここに留まることです。あなたと別れてここに留まることは、心ならずもここを出てゆくことと同じです。あなたは私の身勝手な罪のためにここを追放されるのです、――今の私には、あなたこそ大空の下におけるすべてであり、すべての場所なのです。私のせいですべてが失われたとはいえ、私から生れるあの約束された御子（キリスト、イエス―注）が、すべてを回復し給うという、身に余る恩寵を示された今、私はその慰めを心にしっかりと抱いて、ここを立ち去りたいのです。」われわれ人類の母なるイーヴはこのように話した。

と描かれている。こうした『失樂園』の「アダム」と「イーヴ」の言葉を、「草枕」の「アダム」と「イーヴ」の言葉に比較して見ると、その相違は歴然とする。くり返しになるが、あえて引用してみる。この花園ばかりが宿かいの。二人で添ふて暮らすなら、あのおそろしい地獄も極楽。添ふて添はれて暮されぬ、哀しい中であるならば、このうるはしい花園も、何の役にたとうぞや。」というものであり、「イーヴ」の言葉は、「あゝそうぢや。こうして添はるゝ

ものならば、闇でもいゝ。地獄でもいゝ。（中略）元はと言えば是も皆、誠から出たこの身の罪。いとしさからの恋の罰。こうしたことになったのも、みんなイーヴの心から。われ故いといひアダム迄、この花園を闇にして、身の行末の末の末、どうした事になるのかと、思えば胸もはりさく斗り。あゝ生きらるゝだけは生きても見たい。添はるゝだけは添ふても見たい。」というものである。『失樂園』の「アダム」と「イーヴ」は、「そして、摂理が彼らの導き手であった。」とあって、神の摂理によって導かれて「樂園」を立ち去って行くが、「草枕」の「アダム」と「イーヴ」の場合は、「身の行末の末の末、どうした事になるのかと、思えば胸もはりさく斗り。」と、暗い情念の世界への沈潜を予感させるものとなっている。一方は、究極的に神の側に立った思想であり、一方は、神に反噬した人間の側に立った思想である。「イーヴを懷ふ」に示されている、「神とゝもに生きむよりは妻とゝもに死なむとはげにあさましの人の心や」という思想はみごとに否定された。ここにキリスト教を媒介とし、しかもそのキリスト教にそむくかのような人間中心主義を志向する藤村のヒューマニズムのあり方が明確である。

藤村は、キリスト教が否定する人間の中にひそむ暗い情熱を、キリスト教的世界に素材をとりながら、それを否定的にあつかうことによって、そうした情熱を肯定したのである。

藤村は、明治二十一年六月、十七才の時に、彼の恩師であり、牧師でもあった木村熊二の手によって受洗し、クリスチャンとなったが、明治女学校の教師となり、佐藤輔子と出会って恋愛の苦悩に落ち、関西漂泊の旅に出る時に、教会を脱会していた。周知のように、藤村は、意識して教会に反抗したわけではないが、その後はキリスト教から離れて行くことになった。「草枕」の反キリスト教的

な世界を思わせる主張の背景には、こうした事情があった。青年時代の藤村の、キリスト教理解の特徴と、そうしたキリスト教の教えに満たされない自分の心をあつかいかねた体験は、小説『桜の実は熟する時』に描かれている。

注

- (1) 島崎藤村著『藤村私記』に、『草枕』はミルトン『失楽園』の自由な翻訳であつてその発表を思い止まらせようとした『善罵先生』とは、当時、本郷区竜岡町十五番地に住む孤蝶のことである。この『草枕』を、シェイクスピアの『ヴィナス・アンド・アドニス』より訳出した以前の『夏草』と共に、禿木は後に一本にまとめることを勧めたことがあると、柳田泉氏の話であつたから、『強ひて若水のすさび』として、『文学界』一月号に載せることをすすめたのも禿木であつたかも知れない。」とあり、又、「当時の藤村は、(中略)『善罵先生』の戒めにもかかわらず、ある根源思想の転位が内在して、その試みが『草枕』発表に踏み切つたものと考えられないこともない。」とある。
- (2) 平井正穂訳『失楽園』。ただし行分けははぶいてある。以下同様。
- (3) 笹淵友一「藤村とシェイクスピア」(『語文研究』一号 昭和二十六年三月)。
- (4) 本堂正夫訳『ヴィーナスとアドニス』。
- (付記) 平田禿木著『^{遺稿}文学界前後』に、「藤村氏のことはかねて聞いてゐた。(中略)殊に自分の眼を惹いたのは若い折のシェイクスピアの詩『ヴィーナス・アンド・アドニス』の浄瑠璃風の邦訳である。(中略)これは後に『文学界』に再刻され、『文学界』に出たミルトンの『失楽園』一節の、同じく浄瑠璃の訳と共に、一本にまとめて刊行を幾度か自分は勧めたのであるが、氏は何うしても承諾してくれない。」とある。『失楽園』一節の、同じく浄瑠璃風の訳とは、「草

枕」を指すと考えられる。